近代御會和歌集

十五

和書門 類
二七九五七 號
七七 函
一三 架
三〇 冊

内閣文庫
和書 類
二七九五七 號
三〇 冊
二〇一 函
八 架

内閣文庫
番號 和 27957
冊數 30 （ 15 ）
函號 201 98

国立公文書館
National Archives of Japan

寛文八年二月十五日　聖廟御法楽

山霞

なかめやるみやこの梅も山もはる霞に色そ見えわたりける

若菜　　基熙

時もはる野辺の雪まにもえ出る若菜やたれか摘にし

朝鶯　　光雄

日影さす梅のにほひの朝露も打とけて鳴うくひすの声

夜梅　　基賢

あやなしはたれかいひけんよるの梅かをるよはのあらしにきこえて

岸柳　　貞従

明治十五年購求
浅草文庫

春といへは氷のみきはもえ色そふ柳の陰とけ渡して　光平

春雨

人ことにあふく代の恵みは春雨にうるふ草木に見えてしる哉　宗量

春月

そよしも風もとたれる咲梅の匂ひともえて霞む朧月　頼孝

春曙

横雲も霞にこもる月影もさなからしらむ明ほのゝ山　有純

陶鳥

世をは清く山ともしられ鳥かりくる代の春の聲ふくなかに鳴らん　昭房

翫花

春は年毎にともみ花の色つゝ仙洞とられる人そ咲て　基福

新花

咲ほかり君かみよしのゝ山さくら八重つゝ千代の色を添て　嗣孝

暮春

散りつゝ花ものこされて吉野河かへらぬ水に春そ流れ行

時鳥　同

ほとゝきす声をまちわひ時鳥たゝひとこゑはあかぬ一聲

早苗　資茂

早苗とる袖も小田にぬれ渡る雨の恵みに時しる民の田面よ

梅雨　季定

最つくしつ見しつくしぬる月毎に高きも海なれせしれ浪風

夏月　公通

袖ぬらしたれぬらしれむすふ花乃花にうつる月かけしき

夜草　雅香

秋まかむ千種もわかれと志なりさく草むらの中ゆ中に一花

氷室　経光

ありさ雪もまた江にそては夜は日乃志らぬ氷室は山の涼しき

納涼　兼晴

ゆきて小あたらもしも山水は乃まの涼しき木かけの下石

早秋　資熙

秋来ぬと新堀のわ荻ふきつきて払ふそよめる風そ身にしむ

稲妻　永貞

名残そて庭もみえすて袖の上になれてひかりなき宵の稲妻

澤槿　隆尹

咲いりぬ花のかやや中垣乃露なからてそかへ朝かほ

路萩　俊広

分ゆき行は尾花のなみにまとはれてひとつ花袖の夕露

夕鹿　誠光

夕まくれ月待山乃秋風にいとゝ夜床の妻かよふらん

初雁　通福

秋霧よなとて初かりの来る空の山ヶ越てきつらん

湖月　實福

鏡山なかもうつる秋風に月も見えてや志賀のうらなみ

湊霧　資廉

来る舟の湊は霧の立かくし由良のと渡の行末志らまし

濱菊　基量

ちりうせぬ秋の錦をとめて白菊はよそにもみゆる吹上の濱

擣衣　定淳

たひ人の物思ひ志らて里人のさよも更ゆく賤か麻衣

黄葉　有維

一しほの志くれに紫の深みとり日影や色にそめてけん

薄枯　淳房

むらさきの萩原はよそに霜かれて薄に秋の名残をも見る

時雨　長純

山風のさそひて紅葉ちらさむともなき時雨か

枯野　相賢

とふ霜に秋のち種の枯はてゝ野をも色あるものなき秋

千鳥　實豊

あかしの浦のなしくへの友千鳥なく夜や千代の数をそへて

網代　常治

おしなべる庭もしらまでて見る秋の月影空にはなれぬ風

定月　　雅房

霜雪よりもなほひかりさやけき秋の夜はしづかにすめる有明の月

庭月　　経慶

すむ月の光もさえて白砂の上にみかける玉しきの庭

埋火　　資行

見つつしも花に心ちや桜の花のかをる名残埋火のもと

初恋　　雅永

人しれぬ心の色もいはねども先見えて初にぬるる袖かな

寄恋　　公起

言ひ出でむもかひやなからんなかなかにしも我袖のやどりなりけり

逢恋　　俊景

かきくらし心にしられて君の涙も袖に結びける

別恋　　家條

また見えつつ待夕暮に別れて涙の袖の露さぬくれの袖

恨恋　　方長

恨みある月の光もくもりけり恨ある袖のうへにも

旅恋　　公量

しれくふかくし中を旅立ちてしのぶにまよふ夢もなき

閑居　　照房

きえかへる松の葉その明暮にあらしの外ハ音もなし

野宿　實維

露むすふ山路の草のしきねして袖よりも猶一夜の枕をハ

羇旅　滋豊

さりつくる我のさとゝいひし旅も忘れて志の山路を行

眺望　時成

浦ゝ行雲も海よりかとみえて雲井にかよふ釣舟

懐舊　資忠

かへらぬと思ひなからもやはりひそかになれにしよはぬ昔なりけん

隔離　公規

長き日の光もくるむかしにかへらぬ昔の心をもしら

寛文八年二月廿五日　御代始御内会御当座

早春鶯

鶯もまつ世の始に喜やしらへ九重の百敷のうち　席

雲間花　資行

とはてもにほひいはゝ白雲に花もかくるゝ峯の春風

河款冬　有維

吉野川うつれる山の花乱見えて浪よるそれの色に匂ふ風

夕時鳥　雅永

里なれし物をも聞すへ時鳥まつ一声に名のる夕暮

夜夕立　通福

風たゆる杉むらの夕立すぎぬまもしづくなりけれは

早涼至　通茂

きのふまで色にもみえてし秋のおとは袖にと結ぶ秋の縁かな

山月明

聞擣衣　有能

きけいとよるしづのをだまきくりかへしうちかへすらん衣なりけり

庭落葉　季定

夕時雨と起きの多くへ庭のみちもみちたえぬらし

杜首深　雅章

流されし袂みをりのうき枕かはくまもなき身の恋しさ

寄月恋　資豊

ゆふされての後しや人のことさらむ月まてと契りしまゝに

寄海恋

寄草恋　宗量

いかなる人のつまになる忍草見すなりてしのぶらん

暁更鶏

寄神祝　雅喬

いかにしてふかしれたるしと思ふ代にあふをもそは神もしるらん

寛文八年四月廿五日　御當座

更衣

白妙にきかへてせみの羽のうすき花衣の身そ涼しき

時鳥　基熙

待えてもなほこそなかれ時鳥まれにと行よの一声

浦夏月

梅雨　雅喬

山水もせかぬ里の梢まてしつめもはてぬ五月雨の空

江螢　宗量

夕月夜入江の波にほのめきてあらしとのこして飛螢かな

叢亀橋　通茂

ちりかゝる袖にも月のかけ見えてひさしきかさゝきの橋

水鶏　雅章

聞なれし旅ねにしはなき宿ちかくたゝく水鶏の戸さゝぬ夜半

夕立　定縁

風たゆるこやてらす夕立のあとの涼しき杜の下かけ

河納涼　雅永

吹かへる杜の下かけ夕立の河辺の涼しさよる杜の下かけ

恩恋　通福

さらぬたにこほれておつる袖の露をなほしたひてそ袖にこほるゝ

忍恋　資廉

人しれぬ恋にもなさてしのひつゝ袖よりもらす袖そつれなき

経年恋　有維

年をへて思ひ河いくとしの涙の袖のなかれて

羇旅　公起

露をしる草の枕にしみわたる秋のやとりは夢もむすはぬ

眺望　季定

見わたせは浪のはてより来る舟の浦とほくあまのよる方

社祝

寛文八年五月十三日　御月次

浦五月雨

五月雨は塩屋のあまもたえて煙はたゝす浦そさひしき

後崎人意

契まつかひもなき小車に忍さへぬ人のあはれなりし

阿茶丸

しこ日来日なる人もたえて五月雨はかきくらしたる浦波

かすみえし絶まもいかにしてしけき人めの涙とそ見る

道寛

波こしてたえぬ志賀の浦松もみえてさく波の五月雨の比

かゝりすとよひくちりも見えなくもとみの中そこそいふらんし

権大納言経光

しほ海の浦風あきにゝほふらん米かしある月影の比

曇りあまたよひくるゝとにかはりても名にしほふはれ哀なし

権大納言実雄

浦人のはちゝみわたらむ袖をもれかけて涼しき月影のよる

はらかゝぬ秋中なるも哀れかへても夜ぬ月はいそかよひ

正二位弘資

夜かはてしいり浦に松の星をみえむ吉野とつる月影

あいそこしよなくよりの浪里人のたえまもたにもきかしして

正二位資慶

須磨も浪空よりきぬる月影の雲もいつくみ名の浦

秋はつらむ哀る秋とまくしてといひすゝ夜そもかよいあり

権中納言資慶

きふ名日京わる夜ゝ月影を見ぬる浦の月影のよる

さ風吹ても家あふ夜の哀もやよひくるゝ人めさる庵らん

右近少将平時量

秋月こゝいさくやまをり月影の吹すも清き男子の浦人

よりいや波のさゝ花よ秋みれわかれよ見ても志らぬ契りは

参議右大弁経慶

波路より見えし小嶋も月の夜は空よりわたる浦の遠さよ

うしや我住とも名のみ中川にしけき人めやかよふ下波

従二位家隆卿

夕月夜なかめもしつる須磨の海士のわたりやかかる波路遠くて

あはれ我浮寝もしたる袖の上にいひさそふ人の影や添けや

前参議藤原光雄朝臣

さみのよに待しもやとる夕月夜夜半に鶴鳴浦の明かれてそ舟

うしやうらいひまちてや山の浜ちかひあらにすしおきの

前中務定淳朝臣

あま人の塩くれかはしらぬ浦の遠さやれさそはれの比

かはらしな契し程はみちのまてうしや人の心志らなさりけは

中務大輔源資兼朝臣

冬寒き入江の芦も氷こそ難波の浦は月夜乃比

うしや名のみ契りおかしはかなくも中なる人はすみもおもはし夕紙

左中将公綱朝臣

浦波のよる影をみて須磨の海士は塩志もとめぬ月夜の比

帆のこ潮とかのいはせ川冬氷せるとも中に見らしぬ紀

藤原経尚朝臣

志賀の浦やこほりしかく行舟のかかりすてぬる月夜毎の比

うしや我契し中川にたえぬる逢瀬人のつらさよ

前大納言資成

いつくにか曇る浪つらん霧雨もこぬ須磨の浦の月白の比
霞める波清きなかそてにこそ今はいひしも比のゝ名にし

修理大夫保春

あま人の袖より塩やくいとなみも絶てさひしき月白の比
いふかたもしれぬ身の中には名草の志きしまのみちの中比人哉

左近將監慶

すみよしの浦の松に吹よるも晴れぬ月白の比
さえ絶てもあらにかれく中川の虫の声も人にせかるゝもそむ

内匠頭平時人

いつ海あまやまくらも袖よ志ぼる月白に塩たれまさる涙浦人
東路のさやの中山中にあらしふく吹ちる楓のかけ

寛文八年五月十二日　御當座

雲外郭公

聞捨て行越して時鳥見えて消かつ跡や雲ゐなるそ

恨恋　　弘資卿

さはらんていはるれはたのみこしかれ行末をさへにせめてけりや

述懐

外よりも見る方なきもうき身一節をもたのまぬをうらは

寛文八年六月十三日　御月次

松風如秋

茂りあふ夏にも老ぬ一葉にも秋をまつの風は涼しき

旅泊夕友

嬉しくもともなひなれぬる友よ旅枕夕への松のやとりに

阿茶丸

あかぬ日数まてになりてそ聞松浦の浦ちかき秋の風吹なる

友にこそ世をもなくさめて旅のうきをもかたらわすれて

道寛

夕をとみ人淋しと松の本ぬるより雲ひとりもえぬ秋風そ吹

沖たかし旅人も行ぞ海る夕は伊勢しのまゝに浦風ぞ吹

権大納言源通藤

桐の葉の海にさそひくる秋風の松ふくとする夕浦しも

葦辺の宿とふなまに誘はれてはるかとはいさそ吹

権大納言藤原経光

すゞしさは秋をもいそぐ夕風に聞ゆる松の下かげ

どちらひらくむしんをも夕枕やりて旅人の中も出る

権大納言藤原忠職

夏よ秋は家ならしならぬ涼しさや松風かよふ松の下陰よ

草枕夏のはじめの風なれば暮るゝ伊勢山や松かけかゆし

正二位弘資卿

麻の葉もいつしか散り山陰は海さき秋なる松風の音

とられぬる衣ぬきて此頃は枕より袖の露とぞさらぬも

正二位資慶卿

夏山に見て秋をゑ過ぬ夏涼しき月に吹る松風

とまりにて聞し夕の波にふ宿の睡る夜半の風のさき

参議右大弁経慶

旅の日も夢路にて松枝は袖のうけて見る秋の旅

旅のうき人の宿とさ夕の浪に思しかりける

神祇伯雅喬王

よひ毎に涼しさそへてこぬ秋のしらへにかよふ松風の声

松陰も今をまふそやとりさし嵐山の峯ふくとも

波之徳前宰相実種

沖津波よるへ涼しき浦の江やまたぬ秋風と松にならしく

夕かけくさは松のみとりつゝもかへらぬ夜まさりゆく

前大納言光雄

松かけにひと夕風やまつ田むしろ秋にみるしらへになれし

すむ袖をとにきゝかはるゆふある浦の音さへ涼しき夕暮

前大納言定淳

立よれは暑さも夏の夕涼み松には秋の風そかよふらし

みきはなる人をかへるみなとによりて夜しほの声も旅の声

左中将隆豊

夕暮れは磯の松に声そへて秋まさる初風も吹く

暮ことに山路わけしも夜しも風ひゝきすゝはされ流れて松

右中将実富

立出ていつも秋まさる声そへてとも絶えさるる岸の松かせ

聞ふる松と志るふ夕暮松よいかにそも涼しき波やまれ

越前守経尚

風ふかき夜も松風の涌きもぬ秋と松の木陰に

夜すれいつふすゝしらん夕暮れ志るよ聞にいたる人を

てる月も光すくなき風の音ハさわかしき秋の松の木の下かな

旅人たかの年資蔵

ねよりさそふあらしも夕ぐれ聞しやまのふもとにはれて吉紀

藤原經有大貳陪書

夕ぐれ咲行雨と見しかと見えぬ浦ふこえぬ秋の松風の声

草枕聞しやまのむしをとさしも芦のわけ行たちものゝ夕暮

右少将隆慶

夕暮暮もさけに秋の心地して袖に凉しき紀の松風

旅人の衣に来るまよりて志りしかすみ夕暮の空

内匠頭平時久

松の風名き川岩波とよき今て夏をかるる山のおくの秋

わけはしも夜にして志らへぬれぬ月にそかすむさとの中山

寛文八年六月十三日　御当座

挿頭葵　道寛

今日毎にあふひにあふひのかさしける幾世もとめぬかけに御代

郭公未遍　弘資

一声をよしやたそかれ聞つらむ猶こと人もまたぬ夜はなし

岳早苗　宣勝

かくらぬ津の里もとるといふ早苗も見よ袖

雨中過橋　阿茶丸

ゆふ毎にたひをゆくかほかなる花橋の新しくわたる

瀧水月夜

忘れよとあるかな鬼かの志つくるかな澗をとらし八月の比

螢火　保義

賤かうつかやりの煙立そひてまかふもしるし夜の山もと

夏月涼　時量卿

白妙の衣手の月の新涼し山おろし風や露はらさぬ

庭瞿麦　隆慶

さかりなる庭の籬のなてしこに色くをまそゝけるあさ露

水上螢　隆豊

吹かよふ風の涼しくよる波の秋は螢のかけに見えて

樹陰蝶　通茂卿

紅の林にやいるゝ山さくらみ蝶なく森の木の下露

不見恋　順光

吹風のたよりも人のいつはりて書にや浅き恋わたるらん

初難逢恋　時久

いつまても年ふる初と逢年は秋かけし思ひの森の忍ひ綱

夕待恋　弘資卿

さく見えとなを見えは志らし初やのうちの暑さかちてさきぬ

怜期切恋　定淳朝臣

別路の露のむすひ路中しよさる君かゆかいやかきりし

遠所恋　実種卿

後ハふきまさるよさりけりとよし此義ハ古人申てし

山家嵐　経高卿

峰遠てきよる嵐の音信て跡あかき松の下庵

谷松年久　通茂公

谷かくれいくよ経ぬらん根本にもさは経ある松の老木ら

羇中衣　光雄卿

旅衣山路の嵐吹こえて夜寒さはさねすあけ月の志ろきを袖

初海路　資慶卿

片帆引あまの釣舟ハやふと湖の見えし江に行舟の風まかせ

述懐非一

男九十年ハつはさかり中ても此一河二河よわりあさかる

寛文八年六月十五日　聖廟御法楽

初春　房輔

長行の一夜のあけて花は世に春とのときさ告る鶯の声

霞　通茂

花鳥のいろかもあらたなる風のみか世のも宋さは霞みそめぬる

鶯　基量

春のたちこゑのきて春に契てや千世の初音をとなへぬらん

桜　為治

かつよりや雲ゐにもみて晴を風に庭の桜の花の夕はえ

梅　基福

出ぬれとも又天河霞の色吹出しよかくしも雲井の原の通路

春月　経慶

たなひく霞出かゝる山の端に見し春月の影そへてみる哉

花　資継

咲も今さかりと待て桜花色妙なる春の夕風

同　光雄

花なれやあらし尾上の春風に霞はこほれてかゝる白雲

同　資茂

咲そむる桜かりこそ花香は志らゆきにもまかふ色哉

苗代　相資

苗代に浅も深きやまかすらし小田のかはつの声志きる也

藤　弘資

あさしやはまかゝる色を松かえにかゝる花の色よりそ見る

薔薇　公視

ちる花と思ふもこゝろ東に程の雨はいつる春の薔薇咲

卯花　資忠

神やつる誰としもおもひやとかへ卯の花垣しるしも見て咲

郭公　公量

一こゑは雲井をかけるほとゝきす須磨の縁も轉る鳴けれ

早苗

此夕へ分まよハれさるへ人まちくみなせにさらく風の涼しさ

六月祓　家隆

たれもみな心をゆたにおはしふをむすふみな月祓のそて

撫　有雅

撫子く吾妹むらしれなき袖も露しけくしてそ咲ける花

夏月　方長

涼しさに夏衣忘れてむ夢おりし八月の影にかわりけん

螢　定信

みなれぬと沢辺の水に乱れてもしのふ思ひやきえかねぬる

早秋　基賢

秋よきこそ桜の梢の木かけにて吹きそふ風は涼しき

七夕　資富

稲代よるも秋の夜をまて天河あふ瀬もかはのかちの橋

萩　忠親

身にそしむ東雲の萩か下ふきまよひて秋はたゝ夕風

麻　弘資

よひのまをおく露のまにわくれは山端ちらぬあさくれの露

秋夕　隆尹

風にあかぬ色の浅茅かしけき露けさのみ秋の夕暮

月　雅章

ゆく秋も光そふるや半天の月とともに行てよそふ浮雲

月　　　湛房

くもりなき空にありて湛て山の端わけし月そさやけき

月　　　雅喬

てらす山の月のみかけの秋の色は志られぬ空の風と光まて

菊　　　実淳

錦かく露もうつりにほひくさりかへし庭の志ら菊

紅葉　　顕章

いつも紅葉色よりすくれし村時雨色に朝あけの秋乃紅葉

擣衣　　資慶

さすらふ人旅寝の袖のおもはんをまてしもこそや旅ねつらん

蘆枯　　季定

山風よりしる庭の霜のおくにはれて秋の色へかへしか

時雨　　氏信

深き山路の秋乃雨をきよさはに降りてうつ時雨かな

氷　　　通福

山川の氷の志たもかはらすくくりかへしたえまなき流

冬月　　資湛

枯はてし草葉の人の草むらの霜にさえて氷にかかる冬の夜の月

千鳥　　季定

浦風のつく霞をこえて夜かゝる海にもことにあかさりし

雪　光平

庭のおもにむら〱ふる雪の花とみるまにきえぬるあはれ白雪

同　實継

かりはらに風よわる雪に庭の面はまた露結ぶ人のあはれぬる

歳暮　永貞

立かへり又こんとしとおもへとも暮てゆく名残やいかなる

忍恋　隆豊

よしや人つらきをあはれ忍ふるにこゑてはおもふ袖のなみたを

寄世恋　時量

ふる河の清井のみなもとのちかひはよしや絶ぬはかりそ

祈恋　光平

いかなる神のちかひのしるしにて人こゝろとけぬ

後朝恋　俊廣

あさぬまの浦のきぬにこゑて露地のとりはなにこそ淚をと

待恋　家量

松と人のたのめしゆふのかねよりも今宵あはせぬ中のうらめしき

恨　定誠

うちわたすこのたかき月のみの身につゝまる中の恨を

松

道ある世をうみ陸世と旅人の行もかへるも君かめくみに

音なしの代々の代のたえぬ神の家の松の響きて

竹　　貞従

色かへぬみとりの竹の枝しけみ千代こもれる風の音しき

山家　　資行

天地の開けし後ありて山かけに花さく桃の木の下の庵

旅　　省能

ゆきかへるなくさまて浦なみにたつ旅寝の枕さためす

神祇　　資康

よろつ君をまもるの神にまつる神のみとの松そ久しき

祝　　經光

寛文八年七月六日　御月次

新秋夜涼

涼しさハ明日も同し夕立の雨に色そめしきの秋の風

忠不忘恵

思ふる夜中の松にふく風も秋あれや有つきなきさそふ袖

阿茶丸

今朝ふきぬ荻の葉そよく秋風の聞き秋涼し夜はさえて

今宵ハ思ふる袖とも哉さえ分る秋ハまたそなるさ

通茂

松風のそよとても見ゆる荻の葉にそよくも涼し軒の村雨

こゝろにハ海山かけてひとせ恵ふかきとあらし此法道かきりし

弘資卿

ふるとしは夜はの雨のあめにさへ清水も猶そ涼しの秋の村雨

うらみつゝ我思ふ中に年経つゝあれあれて人のつらさなれハ

資慶卿

秋はきて幾日も夏の名残なくそよく一よの雨に洗はせて

うき雲のうちにも空の夕月と思ふ方にかゝりして

隆量卿

あつき日の涼しく下涼しくも更る秋の雨こそ新の水

うしやけふ思ふ人も我たかひてあらましにて昔の今そ覚えける

隆慶卿

雨そゝく草葉の露も初秋の風に涼しく朝はみたれて

思ひれハさきもそよみに毎年を涸ハ袖にと残る涙も

実陰卿

ちりそむる柳の一葉さそひ来て村雨とふく風のはけしき

あつき日ハ涼みもしらす衣人ゆき思ふの下にみたれそく

光雄朝臣

おちそむる桐の一葉の秋風に涼しさ立てなく村さめ

世人あふにハ久ん命よりたゝ名残志をちく物に心とゝる

実冨朝臣

納涼と苑秋題こは此風の身に涼しさそふる村雨の空
あやなくて月見つゝまつ人心とまりても婦つゝ思ふ中には
経尚朝臣
夕暮は夜ならでも秋の初風に吹て涼しあすは此下露
流も我さは色も加ゝりて月日一たひ人の秋思ふ中をもとめてらく
資茂
始やと終わて荻の葉は音まてぬ新しく涼しくそふる村雨
事の為も思ふ夜の夜を月とみえそうきぬる中をこそまちなき
保春
一と昼りしとぬる跡も初秋乃涼しさそふるひのむら雨

うしとたにえぬ松原思ふ身をわかぬ月日に流るゝつらさ
隆慶
此のまゝ袖に秋風ゆる枯風乃涼しさそふる軒の村雨
人更ならで思ふる中は行月のあらはつるゝはいそ悩まし
時久
とあかは秋語るあかねも夏衣きてくふ涼し秋のむら雨
みせやその跡も志く流さ海くま思ふありしそる秋ぞくれて

寛文八年七月六日　御当座

草花早　阿茶丸

あさ霧の籬の百草の中に先咲秋萩のはな

羇中恋　時久

うき旅の涙そつらきかたみとそたれも別て宿と思へ當

秋枕夢　実種

虫の音もよみそへぬ夢の末なからとる枕の秋の夜なさ

遠村秋夕　時量

夕霧のきれまにみえてたえたえの梢の緑深き村竹

田家見月　資慶

かくてみむ月はこゝろの宿なくも露は門田は霧のやどり

花秋月　　定淳

咲あまる千種の花の色そへてみする月は影もる花

月前松　　順光

浮雲は千里に消て山風の松の木の間に月そいさよふ

深竹月

さやけしれむかふ月も白露はをきそふ竹のはかくの霜

庭虫　　定勝

秋さむき初霜結ふ庭の面によはりつくよかる虫は露けし

野擣衣　　定種

打音も遠里小野の麻ころもよるもたえぬ風にかよひて

依恋祝言　　家量

清まてる神はさを知て只そたのむ祝言をまつ祈るちかひを

逢境恋　　経尚

あひみての後こそ人は増るとかくみその面影いまそたち侍る

契空恋　　通茂

今のかくはなさきにすてられしを思ひかへせし忘れてし身をしれ　下帝

恨切恋　　資慶

うらみ人はかなきをかけて恋はせしや恨てもなほのこるみせ

残生悔恋　　通茂

人ことをしのふころしも露くる説法のみ法きゝしてさ哉

関路雪　宗量

越なれて雪をふみわけし足柄乃関こえこしみちしるへある世は

落葉雪　定淳

夕まくれ秋のあはれも立そひてくみる紅葉を埋竜田浦

山家暁　時量

夜さ海と暁まつの音に又ましも里の声ある山の奥

古寺松

ところからや仏をさまる経声を寺の松の下露

河辺鳥　資慶

大井河せきのとと綱なきたる鷺乃波よりのほる色はよるには

寛文八年七月七日　七夕御會

七夕天象

神代よりさためしやくもゐにて渡る星合の空にしるらし

右大臣兼晴

天河よりかはしの一夜をたなばたの初秋風に契りそめけん

権大納言俊廣

さやかなる月の桂の追風まつはいさよふ天の河なみ

権大納言實維

天河きりのあふかきよ七夕の舟路残るや恋わたるらん

権大納言通茂

きえなましくもの露も星合の空にまよひてや月の影なき
正二位藤原雅章

くもりなき月の光に天の河わたるせもまさし行あひの空
正二位弘資

星合の空吹わたる八重雲を志らすとの風やたえてく
正二位資茂

行合の光さやけし夕月夜秋よりさそふ初秋の空
参議左中将季信

星合の空もてらし月の天の河瀬をみちはけやてりまさるらむ
参議左大弁[illegible]

秋風のつきしふより七夕の河辺をせまる天の川なみ
神祇伯雅之王

久堅のあまのさかりも神代よりわすれぬ中や星合の空
従三位源有維

神代より天の川邊にいくそたひわたりそめけん行会の空
蔵人頭右中弁藤原光雄

織女のむかひ待えしかひとや月にそれゆくあまの河なり
左中将源通福

あまの雲のよそに見えて恨てしちぎりやさらむ星合の空
左中将藤原宗量

雲の袖さその涼しき七夕のこ宵あふせの天の川風

右中将宣富

更まさりよふかくなりてん七夕のあふせたえなん天の川風

右中将公量

或星の仙もさそのと霄もなかき井の月よむかりには

蔵人頭右中弁資廉

天の川白波光もうつろふの空に色そふ契り会の空

蔵人右少弁資茂

星やけふいくよの秋のふかきに逢瀬をまちし契りは

左兵衛佐資隆

更たる夜天の川風吹きてあやにみゆる川会の空

左近少将源為治

帰しまちし星の宿てに橋にんと今夜かかん星合の空

天の川橋となるてふ鵲の羽袖をかへす契りとや思ふ

道寛

寛文八年八月十五日　御当座十五首

十五夜月

ゆくとしの光をそへぬ秋もあらしなかはての空の月のさやけさ

月前風　　雅章

雲もなき夜半の空の秋の風月にはらひの名のみ置て

月前雲　　宗量

又はかなしに月はうきたつ雲もよそにしてはるる空の松陰

月前霧　　誠光

さやけしの夜すからにし山月の光すみのよるの霧のまつむ

山月　　雅永

吹はらふ松の嵐に雲きえて山の端ちかくすめる月哉

谷月　　富量

かくも雲は天かくして月をもしらぬ谷の戸をかゝやかすまて

社月　　資行

むさし野や秋はさかりぬ草の上に月吹そふ露の秋風

禁中月　　香定

あれとも雲井の庭に名のしるく秋の夜の月乃御ことて

故郷月　　雅章

さやけしな軒のしのふにたえてゐる関の尾上の空にすみのほる月哉

名河月　　雅喬

よと川のよとむ風もなかりけりみなかみ流てきよき秋の月哉

月前荻　　香定

ちきりあひてよふかく荻の露をきても月にいとはぬ秋のねさめ哉

月前松　　代丸

あきらけき君か光をあふき見て道の松に月やすむらん

寄月恋

人志れす涙にしむ泪を袖にやとる月そうらめし

客月旅　　資行

旅衣たちしに海山乃よそなりゆく月そともなれ

寄月祝　　雅喬

かきりなき千里をかけてさやけき月ハ君か心のあかさみるも

寛文八年八月十二日　御月次

薄暮催友　新院御製

白玉をつらぬく露ハ京もえ紀ことにかくしと友を志るへも

山新写水

ともすれも新小つかよりぬる池の山の端をうつる月ならして

阿茶丸

秋風に尾花か末ハみえまあつて見しらぬ花をもえ細る

志賀の山もあつたに柳ちりかる花池の水かたみ

石寛

別路の心ほそさまこしなをさ引しまつ花の下にとくこそ見れて

さえひかるつもるあらしの宮城さへうつしてこほりの波は志つかなる

經光卿

花すゝき秋の野風をなひくとてあはれにたれをまねく袖かな

あかすなつかしきなれかし山の端は霧のかゝる水も色そふる

資廣卿

わけしける尾花か袖のこほれる露はゆふくれのかせになひける

そのまゝの山路のけふるゆふの雲に志のはる池の氷なかる

資熙卿

霧ふかく音にのみ聞く里人もかへるさまつらねの通路

池水は底まて見えすしらすゝめ遠さかりゆく山の端

時量卿

花薄野分にまかふ君か名の中にこそあらき袖をひくき

もろこの浦も聞えぬ川すら池の水深にほとゝきす山の端

頼孝卿

かゝる山なみゆかてもにならひて花薄末葉の露は袖にかゝりて

さらの山ねとものの海に浮むかへて見ゆる橘も波によせ

經慶卿

かなしきもあらしのなかになひくも池の尾花は露の秋風

夕風に池の花をも浮ひさうてさそふ川の山の端の影

実種卿

露払ふ花色には山かせの道もなく志らぬ尾花かれはおほつかなし

水上はあらし小倉もて川霧はたち残る山もとをしもて

光雄卿

ゆくへしらぬそことも見ぬ野分にみたれあひたる尾花か末の露

池水にうつる梢の志ほれにも乱れぬこころなき山もとの風

隆豊朝臣

浦波もそおりおりかよふしほさそふ尾花か穂末にかゝる浪色の末

乱れても帰る舟は山の端残入江のたよりに写してそみる

公綱朝臣

秋の野の露にみたる花に行人の袖もふるまて

色もなき池の鏡にうつりゆくみえれ山の桜も

旅人も行過て夕手折して尾花か袖の色の夕風

経尚朝臣

川ならに乱れうつしていさ山のもとなる波に

資兼

志るへして行く尾花によるかりやあれにたとる

秋も知吹く尾花は江乃水に同しみるかの山の端

保春

なひくと尾花か人の露はゆきに今の袖にこほれて

早くも水の下に山の端

[illegible]

雅慶

行人もかよふまなくてたえまなくみえし花さかり

山さくら花散そめし此川波よ花の水の白あわ

叶久

花落隨水よりも流にの道行人もかはらぬかすみかし

花ちる山は富士の根にゆきさへとしもかなしく梅の蒲波

寛文八年八月十六日　御當座

不知夜月　道寛

山の端にかゝるくもゝはれよとやいさよひにける月

雨後月　時量

ゆふ雲はをさまる山のはもさすかにやつきいつる月のかけかな

澗畔月　経慶

山松の木の間もちかきさゝなみのまもる光そ秋の勝

停午月　弘資

あふきみるそらのなかそらのあかれぬもまてふ月かな

指頃月　通茂

風やしる月吹くせこそはゐなか見空にすみてよ秋

観入月　　資熙

名残あれや山の端ちかく行月に光そへたる松の秋風

已入月

入方の月にゆらくる山の端はかくるにそれをさえて見

入後暮月　　資慶

しらひとしせし夜のそらも更しさへ山のあなたも月や隠れ

月前鴈　　保春

ふきなれ月と秋のしらへとてまつたにきこえ鴈やきぬらん

月前麻　　経尚朝臣

ともすれば月に帳て書窓の古きをひらく小簾吹らし

月前虫　　時久

幽かな花月の浅茅にかれてこゑより外に松虫の声

月前松風　　雅春

ともし月に待ちて見るの一村と吹くらひしき峯の松風

月前露　　通茂

ぬる夜の竹の枝の下葉より露も落てうつる月影

月似霜　　河茂丸

姫にかの桂風白く月さえて空にしもまよ霜かとそ見る

月似氷　　順光

月の影やとるもかくれなくして千里の外ま志そする氷のそら

寄月恋　隆豊朝臣

くもりなき月は涙よりぬれてもやとれしらぬ面影

寄月旅行　定淳朝臣

草ねまくらよしや一宵は草枕かりてそゆかん月にやとれく

寄月懐旧　資慶卿

何となく昔覚ゆる月にこそ誰しらぬ友と袖そぬらして

寄月夢

ぬる程の夢かうつゝの覚るそいつの我か月にむかひし

寄月祝　実種

君か代みよとや此山の井の志水君か千百の秋やかそへむ

寛文八年九月九日

菊契多年　御製

出題　正二位雅章卿
奉行　正二位実教卿

左大臣兼晴

我君の花とも秋の契遠く菊の千とせのさかり久し

従一位光平

君か代は海の紀の菊の色ふかくともに千とせの秋に契りて

権大納言資廉

千世の秋我君に契りて菊の花露も淵となりてひさしかるらん

権大納言源通茂

咲菊もいはひの露よかさねてや幾代ふるとも秋にあふらむ

権大納言経光

百敷にうへし咲菊はいつまても君か千世の秋とみすらん

正二位雅家

流れ絶せぬ菊の下水汲てそ菊にもつきし君か千とせは

権中納言資頼

うつし植て千とせをこめし白菊は花をそめぬる君か秋のかさしに

参議左大弁経俊

君かためちとせの秋は九重のにほひにますや匂ふ白菊

神祇伯雅忠

我君か代は長月に咲そむる菊そ千とせの秋も老せし

蔵人頭左中弁忠雄

とし君か代は長月の九重に千世をかさねて匂ふしら菊

左中将源通頼

君か代の千とせの秋の露そともかさねて白く匂ふ白菊

左中将藤原実富

色そへよ河よりなかく久しく君か代の千とせをもたのむ菊の白露

左中将隆尹

時代はかはらて九重に咲菊は千とせの秋は君そかさねて

右中将公量

君か経む限もしらしといふ花の中ゆく千世の日さく
前中納言方長
なかき代のちよの限りまて白菊の匂ひもよしかをる家の数く
前大納言資廉
数多きやまと世の秋の白菊も咲そふ宿の庭の日さく
前大納言資茂
そこひなき淵より池の菊の露落る千世の秋に流れきて
右中弁藤原為治
千代迄の数もやとらん咲菊の花のよそほふ宿の日数
已上十九首

寛文八年九月十三日　禁裏御当座十首
十三夜
あかなくも出るやいさよひの月を今月の光まつ空の秋もたえぬる
山月明　雅喬
しら雲もかゝらぬあたりの晴れく雲井の月の影てぬ嶺そ見やられん
原上月　宗量
むさし野月の影すをかゝる萩の露もさらに宮城野の原
橋月　通福
月はなと出しあつらなりし槙背世の秋よりまさるらん
河月　資行

吹嵐も波も調て祭れはや松もろ共に秋の月風

有能

池月

紅葉さへ浮ふ月にうつりて照そひて秋すみまさる庭の池かな

誠光

庭上月

白雲の山をはなれてさやかなる庭の雪かとや見ん秋の夜乃月

基福

籬中月

空にすむ光をてらす秋の月露にみたれぬ花の籬に

雅章

月前虫

虫の音も秋のさかりの面白くて哀まさる夜半の月影

時成

月前鴈

鳴わたる雁の羽風に月は今そ霧も晴ゆく空にこそかゝるらん

寄月忍恋

実豊

あやなくも人やとかめむ月影にさそはれてこそ思ひいつるを

寄月逢恋

公起

なかなかにあふ夜を恋てよそながら同し空なる月をしのはん

寄月恨恋

通茂

祢さめなく絶てもあはん夜をわすれし人と問し月をもいかに見るらん

寄月旅行

季定

あはれなとかくやゆかしき旅衣露も涙も袖に月影やとして

寄月祝言

資廉

万代と君そ契りて七月の月をなくさる秋そまち見

如題　雅章

奉行　實教

寛文八年九月十六日　御月次当座

林紅葉

そめ〳〵てさる錦の林にも夕日かけ添ふ露のおもかけ

秋思衣

秋の田のかりにおもく康書にも思ひつゝ又秋のかな

八条宮
阿茶丸

紅葉せぬ松もまちに添て分り林の梢ともなりして

道寛

秋のこのみすゝきふた人なましぬ松や此松もいろく露もかな

松にかも松のこゝて紅葉をのさきのみ錦の木は残とも

わか涙ことはりすきぬいかならん世のうきにはをしむらん

通茂

時雨にはぬるとなくて空晴て夕日色こそ露乃まみゆ覧

さのこる人やさまなきにき秋晴の露やおもふの袖の涙と

経光

名にきく空もなこ時かす袖を見ゆる秋のき宗

秋の風に沸きる袖とは袖に人志も涙の色流[illegible]き

定誠

うつろく時雨にそめぬ枝もなく秋の林は紅の色

いふ人も人はこころ染むる月影乃すむ紀涙[illegible]る袖哉

資慶

時雨てく人に志る涙山松乃林に移るつゆ二こは

すき秋の露をとしかもやそ志のに紀[illegible]

雅房

見紀てさへ冬こそみる時雨に添林に一樹そめる

うき中に露の色の袖に人思ふ乃秋風

資凞

涙おもふ梢乃色みる冬こそ紀時雨て空も[illegible]

見る袖の涙と人つくの林の露とさ

教孝

あり遠き花乃かけに分入て分入ては見る雨にしくれそ

人志れぬ嵐のふかきはいつるとわきけれは妙乃紀林の夕くれ

経慶

村志ぐれ袖ちりける山にかへり松かきみえ紀申はそれて

秋の月あかりける袖にちとせあるもあかる涙をそめて

実種

陰さへなかりぬ積ゆくみちの紅葉に散る松そする紀

あくれは家の心も尽しみる雪のいつしか更ゆくみえて夕暮し

実淳

かけつなる秋の林乃見ゆる紅葉にかへるの夕暮日の那

いかにせんさてもうきよと人志れぬ物おもふ身に秋乃山かへと

隆豊

夜の雨の汁の露も錦かしき紅葉の色そ見えける

たとひあすもかつる涙とそ見秋の夕をかこつ袖のなみた紀

実富

露汁るも見ていつて涙にまさる松の色にはかはる

人心あはれ如何花もさきみる色まさるとかに伝おもし

公綱

さびのけ色も深てうつろふ林の色みとも色そ見えける

夏てうたのしら孫る秋の夕紙人のおもふのまのおもふみ

経尚

あまてらす神もさそ松枝のみとりに染る林を秋
清むすふつかさや千種のしけしけの露よりたかき神の広ハ

隆英

ちりてなそたくふも多くら枝の林の紅葉色そまさりて

保香

志か積し家恩ふかきは者にそなくしけりも多く年久と

入日さす林の梢の露霜乃色ふかくこそみえける千と

いはふそしいとそ恩ふかき草木よそふ秋の林の露のこれと

隆慶

竹園も流れ林乃紅葉ははま一入の色やみちぬる辞

いはふせし思ふきららきり秋風にいろくみするし神の広と

時久

為積くらうを支へて流されける竹園の色も流れ林の秋の紅葉の

いはふとし林の中をもきくみ君に朝日の恩ふかき色には

寛文八年九月十六日　御当座

初秋　雅章

荻の葉にきのふハ見えぬ風もあれとさやけき秋の三日月

荻近枕　資凞

聞なくもあらてそしる荻のはにいとゝ露をき秋の夕暮

草花　経尚朝臣

百種のとりどり色〳〵咲花をさそふ夕露の色もそふる

籬下虫　隆豊

よもすから籬のもとにしつかなる夕の秋をうらみてそ鳴

野虫　経慶

きゝわこ山の夕霧かゝる秋の日もまたぬ庵の声さこゆなり

翫月　公綱朝臣

かはらしな浮雲はらふ秋の夜は月のみならし有明の風

木間月　保季

立かへる松の葉かくれ秋風にさそふも清月そこれ木間かな

海上月

なくさみぬうら袖の夜の海はわれもて浪の枕に月をみて

擣衣　時久

露落ぬ木そてぬふなれや唐衣打志まなるよの数しか定めし

通茂卿

山里そ秋のねさめに聞なれし庭の木すゑに海の月かな

恋月　時量卿

海とふてよまし見えしハやしきまれ袖もなかくすて我恋は山路よ

恋心　資慶卿

さてもみし見人のこゝろの心とて袖もなにまつ思ひわすれん

恋涙　雅孝卿

おもてな見涙の川のなかれゆく見え袖にかゝる見えし袖の末かな

恋雨　定淳朝臣

しやみにありてしらぬ雨の気色にまてみすかしさてらふしるら見

恋形見　雅房卿

ほよ衣あらて中ハ見かるいはよ涙まなる人の那かんさくらん

山家　道寛法師

出離れハ世のゆかりの外に住ハとも見えても歩き此花の花そ

田里

よしてやハ田つらの里乃秋乃暮ふる人すらハ鶉なくなり

旅行　阿茶丸

草枕志らぬ野原に結ひて旅の衣そつゆけかり

旅泊波　実種卿

浦吹く風の夜もすから磯の波の音衣よしかく涙とそも

岩間松　雅喬王

秋深く夜も更けて志ち毛る色ハ山松のこたへに婦かきぬ

寛文八年十月十七日　新城御月次

江辺芦

見し秋の露の玉江は名のみしてをきかへりける芦の色

閑居燈

すむやされ一村竹の世の中にありとはかりの窓のともし火

阿茶丸

釣すてし紀の霜柄も露しくるゝ秋の入江よさむ紀芦のむらさき

さくらとみゆるの夜しらみつゝ秋かすむ窓の燈のかけ

道寛

かはる浅き入江の波に漕出て芦分小舟あまた来にけり

誰とみてうき世の秋の宿のかけにならへる釣の灯

通茂

霜かゝる葦のかれ葉白鶴も入江も波も一つ色みえて
消かてゝわかれしるられ中の外にもみえけるそれ宿の灯

維光

見られは難波入江は浦風の音も寒し蘆のしつ(?)
見て我友ならふ人をもなきにかゝるさそふある宿の蘆火

雅房

みられぬ入江の蘆間に霜さえて更行月の影そさひし紀
旅人のあはれをなかは夜ふかく枕にかよふ火

資熙

難波かた浦風さえて霊氣に入江の蘆の色そさひし紀
枕をも涼しかるらんかけて涼しき独りさひしき宿の蘆火

時量

色もかく末の葉ぬれし江の水も夕に蘆の霜は白きを
友とみしむかしの花をもの枝さかりをみさとらむ

維榮

難波江の波は氷にさえゝ蘆の枯葉に伝ふる風
こゝろし火影むとまりそて旅人はあはれ宿

実陰

陰さえて入江にむすふ芦のつのくむほともなくさ待らく
志かのうら浪よりけのこほりやよるもの影に夜半の冬哉
光雄
水鳥の床もあらはに見しまゝの入江さひしき芦の下枯れ
鴨の羽かひにそよくも我袖のはらひかねたる霜のさむしさ
文冨
風さむき入江になひく志賀の浦芦やいよいよ氷るらん
さひしさも此山とみなれぬ今夜とてむかふ窓の雪哉
維尚
難波かた入江のあしは枯てそ跡見えてとまる紀の霜の色
さゝ浪やよせて志賀のからさき宿にかゝれてもむかしにかへる夕陽の影
資茂
汀にはよせる雪もあらぬみなと江の芦の枯葉は風もさそはて
秋越さむき吹入風も身にしみて浦にかよふ紀の海の雪哉
保春
難波かた入江の浪も高瀬にて氷にとつる芦のむら
かゝるなる夜の松原の枝ともまたれ光にみる浜松の雪夜哉
隆慶
難波潟浦風さえてみをつくし入江の芦にとけぬ夜の氷
問人もなき山里はふかき夜をともにむかふ窓の雪の夜哉

時久

うき涌る中に入江乃芦鴨のさわかしき羽そ浦ゆふ色はちり

かく袂乃きれ志河ちかき鶴か友のかりそてしらふ霜の町

寛文八年十月十七日　御當座

鶴時雨

浅くしも秋のさえみちきこえていまうし　あやなく時雨れと鶴はなきそ

夕霜　道寛

松のうらや霜もさえていむかしの風寒あられにさえて霜氷ちる

見残菊　時量

此比乃霜にもかれぬ菊の蕾のへも庭花の袖乃あまりた白菊

庭寒菊　隆慶

鶴かくし霜おく霜にもれる庭の面乃ちり種の色はそれならぬ花

氷初結　經慶

紅葉ゝハ庭よりなかゝ河よりもちるもとむるに流るゝ秋かれ

冬月　同

夕風よ岩ねのまつもさえて木の間さやかに冬の夜の月

冬夜長　時量

袖さむしこほりもむすぶ夜はなかゝりてなほ残の空に寒さのまさる

水鳥　通茂

落くる紅葉ちりかふ池の面にあやをよしつてうかふ鴛鴦

冬鷹　実種

あかすみし一よりかともかりしらそ大野の冬かれかり人

浅雪　弘資

ともしひへ人をへたてゝ雨ならぬ光ハ雲まよりもれす

春恋　定淳

よしや人心のかはるにこひよりてたえにしよりそ頼む契のかな

夏恋　道寛

なかしけふ夕月さへに六月の君の月かとおもひやるらし

秋恋

人の秋にまたて玉萬かれてそちる風の音にまされて

冬恋　通茂

秋よりも人の心の浅茅ちりかれては海さん嵐風そふ

旅恋　資廉

人いけし多かなふこそたし草枕露もうつれ蓬れならぬは

山榊　時久

神路山とけれかはらん久方の白ゆふかけて宮の玉榊

植藤紫　弘資

うつまてうつるもなこころならぬ紫にて墨たらぬ藤ならぬ風

秋風　資熙

身にしみて志ら秋の手枕もいつ紫にかはりて色なき松も色の嵐

旅宿雨　実陰

あまそそて軒端かこつて今は雨風まさりしみもにみ

寄松祝　維高

治まれる御代の千代かはれてや千代もかはらぬ松の民

寛文八年十月七日　御當座十五首

時雨　雅章

その海てふ嶋りも浅く見ゆ空に晴て又きゆる風の空の時雨

橋落葉　雅章

山人の跡もたえけて行かふもとそへて紅葉とちるや谷のかけはし

江寒蘆　雅永

難波潟入江の浪に見し秋の色もかれゆく蘆の末葉

夜千鳥　季定

小夜ふけて空にみちたる風月新子浦風さむみ千鳥なくなり

暁寒月　通茂

月ふれ流るる川の音さへ見えて詠る秋の夜の哀れそふ

行路雪　　頼業

来る人も見えぬ雪に跡もなく道一筋の松そ知る

巌岩雪　　行豊

と細いよる雪は見えて跡の主もなくうち過ぎて嶺の松の梢

寄曙恋　　公起

なる暁とも山の中に流れ出る月も猶さえて絵に秋山の霧の空

寄鶏恋　　代丸

とられても玉衣の裏にしらるかつ有明の床に残る面影

寄夕恋　　通福

あり明と別れし朝の鐘の声待ちて人は来ぬ夜の空

寄鐘恋　　宗量

契りし夜は待つかひもなき鐘の音の声いつはりとなる

寄洞恋　　雅高

岩清水井に世をかたみの洞の涙なとふかき見えて

山家嵐　　有維

住侘ぬ嵐のおとしれてつまてる川をも越えて嵐の山里

羇旅関　　滋光

かりそめの日数ふるにも旅衣さそふ越の白河の関

松間年　　基紀

年経つゝ栄ゆる庭の松か枝も君か千代にもならひてや栄

出雲　雅章

奉行　為條

寛文八年十月十三日　御当座

冬山月

白雪の光をそへて山の端に秋よりもなる月そ加はる　行豊

池寒蘆

さひしさに霜枯ゆく冬の池の氷まにそよくあしかな　公起

暁千鳥

霜さゆる浦さとに月のよも更てあけかたちかく千鳥鳴なり　通福

夕鷹狩

暮つゝも狩場の交野かり衣雪うちはらふ袖のさむけさ　資廉

庭雪

老にみる夢のまにまに山の端の月の庭の白雲

竹右　　雅高

陰になる松の葉のみはなれかねて[illegible]の風

蔵蓄　　雅永

うち捨て行年の名残もてゆく[illegible]松の枝の海なる

速昭卿　　有維

年月のあはれのむかしをしのふる宿[illegible]のこる

翠卿　　誠光

うれしさは宵のうちにや[illegible]あるかたの風

待卿　　通茂

年の夜の[illegible]ひとつを[illegible]やあるみえん

初[illegible]卿　　季定

あはれてあはの[illegible]なくして[illegible]

別卿　　基起

鶯の声[illegible]の[illegible]

[illegible]村卿　　代丸

なりゆく里はそこともしらす白雲にかくれて[illegible]風

[illegible]肩風　　定豊

[illegible]人[illegible]の[illegible]

[illegible]云　　雅季

ゆくすゑ御代のためしにひきつへき賞なく人もみえさりし記

寛文八年十一月十一日　御月次

冬色　　新院御製

江はすゑの汀はこほれぬ霜とりて立まよひなく冬ゆる鴛鴨

冬雨

枕さへ身をも涙のあまそゝく冬のさむさもしられぬるかな

阿茶丸

花もみちなくちりし後の色に残てむかし秋の色を

かすむ花と散りし跡を残ると人はかつしにこれしる

通茂

花もみな一葉のこらぬ木枯に風の音さへ色かはりして

まれに結ひこし中よりもかはらてかくしも袖はぬれしと

維光

吹よもすからの風のさそひて時雨る雲は色もさきさき

あはれ年のかはる秋の中そと身を忍れは涙の色は袖にみえぬ

資慶

冬枯の梢さへ秋の霜に涙の色ふかき色にほひぬ

ぬれてそきて袖も涙もかはるにうきぬ夕暮の雨

雅房

いたつらに秋見し人の色そへてとこの白妙に露の袖をも

ありし袖の涙よいやますますに袖をもぬれとうき世をみて

資熈

きえなんやうたて露は色をしてみえる袖の涙の色をそふる

人しれぬ秋の夜すからもちれは袖の涙は色をしのふる

重孝

みよし山もみちはそれとしのふ袖に色ふかき涙のつゆ

しけきやまのうちはそてにあまる涙もてかはる色もなし

実種

さゆるよの秋の夜の色そへて霜のこほりの色にそへてかなしさの夕暮

ゆふくれに秋ぬる雨とけふしもやそて涙そふ袖の色かな

光雄

此さく山をうつし植ゑて白雪のかゝる色を見るにも
さりとも此紛梅にて降雪のこゝの梅をゆる春ならし

隆豊

あか紅葉かつちるそれもちりて春秋にみたりし色や雪の明ほの
猶よひのさかり忘るゝ雪にも妙りてそ消えん袖の霰は

実富

梅よるし千種の花も名のみ成る霜おきめくる花ならぬ白雪
冬よし見袖のからくは吹く風へ雪もちる花

公綱

春秋によるし色をそへて此比はみかく白妙の雪の下の端

庭の衣紀名こそ花に積もりて雪ととふかなる雪のさやけさ

保春

秋の色にほきも紅葉散る松の枝は雪さへ白妙の雪にうつる花
いかにして折らぬ人にも見せつる霜の雪は有れ也吉野

隆慶

草も木も冬枯るゝ庭にて雪にうつりてみる色ぞする
かつ見えし袖の露の雪にて残る積もる枝におもしろき

時久

白妙の雪より外は色そなき秋は千種にうつろひし此山も
袖にのこるもなし色人は雪ならぬ雪の村雨

寛文八年十一月廿四日　御当座

霞隔行舟　資慶

かすむともわかぬ山見えぬまて河舟人も遠く見えすなる沖の夕波

梅有遅速　順光

紅はさきにやまさると梅か香の色よりさきに遅れても咲く枝

桜花盛開　阿茶丸

さくら花さかりのさかりの雲気とされかくらつと咲ぬ白雲

遥見春駒　定淳

八重霞そこともしられぬ見ゆるは沢乃末にいはふ若駒

惜春似友　定種

引とゞめぬなかなかに行まよふれとせめてみなとに讀

時鳥數聲　隆豊

行々も猶日あるへき時鳥きのふの月をさそふ聲かな

深夜鵜川　雅房

大井川夜ふかく篝さしてしばしにてはしてもせゞの鵜舟なるらむ

風告秋使　公綱

萩の葉に音つれて初て秋ぞとは告知夕風のさびしさ

女郎花垣　雅喬

色そへてたれとむすぶ女郎花まがきの露はしをりなくとも

荒薄從夜　隆慶

ことゝなく海ねぶり尾花たれは尾花の旅人

雲間初雁　宗量

晴つゝもかくれは雲の空にきて雲まにつたふ初雁の声

湖上眺月

さゝ波やにほてる海に影そへて清見にさしくる山の月

寄月眺望　雅喬

比良の山のむかひも遠く見て湖ちかく山のむかひの高嶺も

極夜忘色　保春

思ひねのうちに積し恨もなく夜とのうちに恨みはてしを

別不逢恋　経尚

濁りぬる心はさこそ見えもせめ頼てもいふ人の住居

梅花書窓

ある事を文をかよりて若の浦にしほれぬ君の心ほしと

人傷恨恋　　道寛

まち侘る年も幾度の夜半にも一夜とやいかに侘しき人の

苔為石衣　　資慶

舞おもひは流れたまさりて人も山路のいはほの苔よ袖のかはかぬ

夜色賞涼　　道寛

宵の間も風かよふ夜は代えてたもとならさる夏もわすれて涼しく

山家道年

住なれし世は帰らし深き新塔の松を友とする人にして

寛文八年十二月十六日　御月次

歳暮急於水

行し先も滝津瀬よりも年波のはやくも立かへりぬる

海邊見鶴

住吉の鶴はいつれの松の陰にこゝろ寄せ波のよるへ給

阿茶丸

はやせ川よとむ瀬もなき流にも程なく暮て急く年波

和歌の浦や汀によする白鶴の羽の色も波にまかへて

道寛

行年のはやくもすくる吉野川　氷のしたもとゝこほらし

志らへちよふる川の中州にもくもゐにいて遊ふらむ和哥の浦鶴

通茂

年たちて遊る芦の浦はの瀬々の中にもよるを志らぬ見た
ときはなる川に記むなと吟ふその入江志川に友なふる友鶴

資慶

大井川かたえ北にすむ氷の池乃行てなよくは君か年へ
夕暮の月まていつころ浦波に立ゐのむ鶴の声そきこゆる

維慶

月も日も立ならへてはるかなる川の氷より見えたる年へ
難波江や難にかよひて白波とあらそひかねつる鶴の毛ころも

実種

松も猶浦行波にてぬれそよろつ代まち瀬にすむ
かはらぬつるの千とせも志るし和哥の浦の松にむれゐる鶴の毛衣

光雄

さく花あくる氷の池をみすてて絶なく万代年は
打よする波のあやなき白鶴乃磯辺とまもる松か枝

資豊

志らかはにすむ瀬々の君か代の氷よりも千とせ年波
難波江や霜にかれし葦の田鶴の羽風に千代をいはふなれ

維尚

たゆふきの滝浦よりまた暮て今の和哥浦波ハ志つかなり

和哥の浦や干潟はるかにあしたつやみちくる汐に立さはく覧

資茂

月白くすみわたりて暮の和歌に見ゆる秋風の吹ハよとむ岩根を

色浦に波のしきをまちてあつまりてよするしら露

保春

花ふきよせ見をミつ秋の和歌の浦のたえぬもこと葉の花を

打よするこゑハ浦の浦よりてさらにも見る浦のあかけ

隆慶

まとむ暮なりてすみる水よりも秋の見えし暮哉

和哥の浦やみち来る汐に立白波よ清き浦の色もしらぬ芦田鶴

時久

かへりこぬ水よりも和哥波乃すみれて暮行ハ抑し

浦よと見えるゆふへにても芦の浦の和哥にまかりぬ身は志つ波

寛文八年十二月十六日　御当座

冬暁　通茂

よひの海山見し月よりもあかつきの空すみかへる霜の跡

冬湖　経慶

白妙の雪の里の一しほにさゆる湖の氷にぞ見る

冬夕　宗量

秋の色は流るゝも常に山嶺の夕かたなる色にみえて雲けさ

冬秋　通寛

冬山　実種

行かひく雲は浦とれ山をとよ露の山城宮にかゝるらく

名所花　　経尚

かれやらて雲の下水とゝめすは色をみせなる花のさかりかな

名所杜　　通茂

こからしも杜の下露ふきあらして積るいくよの宮や跡たえ

名所河

ゆふ浦も紅葉の錦立田川宮城かけてはいつるころかな

名所滝

さえまさる水にたえたる滝つせは枯野の宮城布の滝ある

名所海　　資熙

滝波の音にも聞くてもおかさかゆる霧のはたへおちゆく須

名所草　　頼孝

武蔵野やそれとも見ゆる草も名のみにて風ふく秋の野邊にかゝる跡

名所木　　顕光

名にしおふ積るともれぬ大井川中小倉の岩根の末をまちはつ

名所鳥

山里の垣根の草は加積れそく人もなき末をすゝか冬

名所獣　　資慶

代々はさそれ深山の雲の宮にやすく婦の鹿もあらしか

名所衣　　同

身ハおさ色を恋てや下海ていとりし袖のよそにもそなふ

名旅　竹久

千数の袖にへ露ある比乃頼ハ流るゝ比久く行ん宿もかし

名庭　巧斎丸

荒れなれし庭やれさむしろかゝる志れ袖に人とも知る露と言て

名桃　時量

宮の内を晴るゝと霄そ思ひてもなくく見る月も出れるけ

名蓮　保春

若妹か花咲山のきしにとられても花見しきそるゝ人の為

名船　隆慶

海士小舟こゝ海ハつとも波の上に吹しく風の音波さそひて

国立公文書館
National Archives of Japan